

ウェスレーの確証の教理 についての追考察

梅田 昇

確証の教理 (the doctrine of assurance) は、救われた後の信仰の確信の事であり、信仰者は救われたことを知ることができ、それを確信することができる。確証の教理は、聖霊の証しと密接に関連した聖書の教えであり、ウェスレーの神学を理解するために重要な教理である。カルヴァン主義では、神が選ばれた者を守られるという救いの確信とウェスレーン神学と相違があると考えられる。ハーパーは、「救いの確証は、ウェスレー神学の中心的なテーマです」¹とウェスレーにおいて確証の教理が重要なことを指摘した上で、「救いの確証は、メソジズムの永久保全説ではありません。彼にとって、救いの確証は神との現在の関係を意味しており、将来に対する保証ではありません」²と述べて、カルヴァン神学の「永久保全説」(eternal security)と明確に異なっていることをハーパーは、論じている。カルヴァン神学の「永久保全説」では全能の神が救いに選ばれた人を永遠に守られると教える。ウェスレーの教えた「確証の教理」は、カルヴァン主義の永久保全説と明白に異なる。

Kenneth Collins は、確証の教理について「18 世紀におけるメソジズムの、

¹ スティーブ・ハーパー『現代に語るウェスレー神学』(福音文書刊行会、2004年) 75 頁。

² ハーパー『現代に語るウェスレー神学』 77 頁。

より広いキリスト教会に対する貢献は、確証の教理であった」³と明言している。

Forest Benner は、“The Immediate Antecedents of Wesleyan Doctrine of the Witness of the Spirit”という博士論文を 1966 年に提出し、受理された。Benner は、初代教会、教父時代の理解を整理し、また、宗教改革者のルターとカルヴァンの理解を分析している。更に聖公会、アルミニアン立場、モラヴィアン理解を調査した上で、以下のように指摘している。

ウェスレーの教理形成に貢献したプロテスタントの最古の教えこそが、伝統的な、正統的な立場よりも、ウェスレーの確証の教理に近いということを観察できる。ウェスレーは、さまざまな源泉から学び、その一つがモラヴィアンである。ウェスレーは、神学の分野を聖化と確証の教理という 2 つの重要な理解に確かに結び付けている。⁴

中村謙一が 2006 年、「ウェスレー・メジスト研究」誌に「ジョン・ウェスレーの確証の教理についての一考察」という貴重な論文を寄稿している。ウェスレーの確証の教理の理解に大きな貢献をしたと評価できる。これらを踏まえて、ウェスレーの「確証の教理」について論じてみたいと願っている。

I. ウェスレーの確証の教理の源泉

英国国教会の伝統と教育の中で育ったウェスレーは、どのようにして、確証の教理を保持するようになったのだろうか。韓永泰は、確証の教理について「彼はこの教理を近くではモラヴィアンから学び、遠くでは清教徒から学んだのである」⁵と述べている。ウェスレーは、1756 年 2 月 5 日、Richard Thompson への手紙の中で、「同様に、すべての信仰者は神に受け入れてい

³ Kenneth Collins, *The Scripture Way of Salvation: the Heart of John Wesley's Theology* (Nashville: Abingdon Press, 1997), p. 131

⁴ Forest Benner, *The Immediate Antecedents of Wesleyan Doctrine of the Witness of the Spirit*, Temple University, PhD, 1966, p. 207.

⁵ 韓永泰『ウェスレーの神学(I)』(ソウル神学大学出版部、2012年) 233 頁。

ることを直接的な啓示と呼べるかもしれない超自然的な証拠によって意識できると強く、しばしば宗教改革者のルター、メランヒトン、他の人たちが（すべてではない）が主張していることを私は知っています」⁶と述べていることは興味深い。確証の教理が宗教改革者たちに由来していることを指摘している。ロバート・モンクは、確証の教理に関して、ウェスレーとピュウリタンの共通性を指摘している。⁷

L.M. スターキーは、『ウェスレーの聖霊の神学』の中で、確証の教理について、聖書に基盤を持ち、キリスト教会の歴史を貫き、ウェスレー自身の経験を通して、吟味され、確信されたものであったと記している。⁸彼の受けたアングリカンの豊かな神学的な教育に加えて、彼の信仰の経験と歩みを振り返る必要がある。

A. 父サムエル・ウェスレーの感化：

ウェスレーは、父サムエルが牧会していたエプワース教会において2年間、司祭補としての働きを援助した。その後、父サムエルが72歳で、伝道生涯を全うして死を迎えようとしたとき、1735年4月25日に、息子ジョンに「息子よ、内なる証し、内なる証し、これこそ証明、キリスト教の最も確かな証明なのだ」⁹と言ったとされる。父サムエルは、エプワースで奉仕した英国国教会司祭であり、アングリカンの伝統を受け継いでいた。ロバート・モンクは、「ウェスレーは、熱狂主義の非難に対して、確証の教理を正当に弁護するに当たり、確証は、確立された英国国教会の正統的な遺産の一部分

⁶ John Wesley, *The Letters of John Wesley* (London: Epworth Press, 1960), III : p.159.

⁷ Robert C. Monk, *John Wesley: His Puritan Heritage* (Nashville: Abingdon Press, 1966), P.78.

⁸ L.M. スターキー『ウェスレーの聖霊の神学』（新教出版社、1985年）、101頁。

⁹ ページル・ミラー『ジョン・ウェスレー』（いのちのことば社、1983年）、32頁。野呂芳雄『ウェスレー』（清水書院、1991年）88頁。スターキー『ウェスレーの聖霊の神学』122頁。

であると示そうとしたことは真実である」¹⁰と述べており、父の遺言的なことばがウェスレーに与えた影響を推測できるだろう。後の1738年5月24日に、ウェスレーはこの内なる証しを個人的に経験することになるのである。

B. スパンゲルンベルグの質問：

ウェスレーは1735年10月、自分自身の魂を救うという目的のためにジョージアに向けてシモンズ号で出発した。航海の途中で、船が嵐に遭遇し、死を全く恐れないモラビアンたちの信仰に深い感動を覚えたのである。ジョージアに到着して間もなく、1736年2月8日にモラビアンの牧師スパンゲルンベルグに出会い、ウェスレーは、内証について質問を受けた。「貴方は、ご自分を知っていますか。神霊は、あなたの霊とともに、貴方が神の子であることを証ししていますか」と質問されて、ウェスレーは何と答えていいのかわからなかった。¹¹ 救いを知的なこととして理解しても、個人的な信仰の確信を持っていなかったことをウェスレーは記録している。

C. ピーター・ベラーとの出会い：

ジョージアでのチャブレンとしての働きをしたが、ソフィアという女性のこと、問題が起り、失意の内にロンドンに戻ったウェスレーは、モラビアンのピーター・ベラーに出会い、彼のアルダスゲートの経験に向かって、大きな感化を受けたのである。中村謙一は、「ジョン・ウェスレーの確証の教理についての一考察」の中で、ウェスレーの確証の教理の源泉として、ピーター・ベラーを挙げ、ウェスレーの日記を詳しく分析しておられる。¹²

¹⁰ Monk, *John Wesley*, p.86. ウェスレーが『理性と宗教の人々に対する更なる訴え』（1745年）、Thomas Church への手紙（1746年）、Bishop Warburton への手紙（1762年）において、確証の教理が英国国教会の教えであることを論じているとモンクは述べている。

¹¹ John Wesley, *The Works of John Wesley*. 14 Volumes. Edited by Thomas Jackson. Grand Rapids: Baker Book House, 1986, Vol. I : p.23 (以下 Works と略す) ; 山口徳夫訳『標準ウェスレー日記』（イムマヌエル総合伝道団、1984年）、I : 79頁。

¹² 中村謙一「ジョン・ウェスレーの確証の教理についての一考察」、ウェスレー・メソジスト研究7号、2006年、105～109頁。

野呂芳雄は、ウェスレーの確証の教理について次のように述べていることは興味深い。

1738年5月24日の回心は、むしろベラーのこの新しい教理との関連で取り上げられなければならないのであって、確証の教理は、明らかに、ベラーの影響の下に、今までのウェスレーのその点についての教えと断絶を示す形において、形成されたものと考えて差し支えないだろう。どの点でそれは新しい教理であったかという点、ウェスレーがアルダスゲート街の回心前においては、確証を信仰と業との共同において獲得されるものと考えていたのに対して、ベラーは、キリスト・イエスによる神の愛の現れにただ信頼することによって聖霊の証しが与えられる、と教えているのである。¹³

ベラーは、ウェスレーとアルダスゲートの経験の前に何度も面会し、語らい、ウェスレーが信仰による義認を見出すことに大きな貢献をした。ウェスレー自身が信仰による義認を経験することで、聖霊の証し、確証が与えられたと言えよう。

確かにモラヴィアンのピーター・ベラーの影響が大きいことは認めなければならないことに率直に同意するが、前項で述べたような他の影響もあったのではないかと考えられる。

II. ウェスレーの確証の教理の特徴

ウェスレーの「確証の教理」を理解するために、彼の著作、説教を読み、分析する必要がある。

A. 彼の確証の教理の理解：

ウェスレーの著作は、膨大であるが、「確証の教理」に関して、整理された論文があるわけでない。彼の「確証の教理」に関する彼の理解は彼の著作（日誌、手紙、説教、神学論文など）に散りばめられている。彼は「確証の

教理」に関して、彼の著作や説教の中に、どのようなことを記しているだろうか。

ウェスレーは、1745年12月30日、Mr. John Smith への手紙の中で、確証の教理に言及している。「私が証明しなければならない教えを知っている。私はそれから、髪の幅も離れはしない。平安、喜び、愛で心を満たす聖霊の感動なくして、誰もまことのクリスチャンとは言えないし、それを理解できない者は、それを持っていないのである。これが私が主張するポイントである。私はこれをキリスト教のまことの土台であると受け止めている」。¹⁴ キリスト教教理への単なる知的同意だけでなく、聖霊による生まれ変わりや聖霊の証しがなければ、まことのクリスチャンとは言えないことをウェスレーは、明白に強調した。

B. 証しの二重性：

確証の教理に関しては、3つの典型的な説教が挙げられる。3つの説教とは、1746年の「御霊の証しⅠ」、1767年の「御霊の証しⅡ」と1746年の「私たち自身の霊の証し」である。

藤本満は、1746年にウェスレーが「御霊の証しⅠ」と「私たち自身の霊の証し」を著した時代的背景について述べている。「信仰者が聖霊の直接的、内的な印象によって救いの確証をえることができるという教理は、当時の英国国教会から激しい批判火矢を浴びることになる。もともと英国には冷静さと質実さ、きまじめさを重んじる傾向があるが、加えて時代は理神論を中心とした理性主義、合理主義に傾いていた」¹⁵。ウェスレーに指導されたメソジスト運動は、熱狂主義的な危険な運動であると英国国教会から厳しい批判を受けたので、ウェスレー自身、「御霊の証しⅠ」と「私たち自身の霊の証し」という説教を著したのである。

前者2つの説教には、ローマ人への手紙8章16節が用いられている。ローマ8章15、16節には、2重の「信仰の確証」が述べられている。「あなたがたは、

¹⁴ John Wesley, The Letters of John Wesley (London: Epworth Press, 1960), II : p.64.

¹⁵ ウェスレー『ジョン・ウェスレー説教 53 (上)』244頁。

¹³ 野呂芳雄『ジョン・ウェスレー』(松鶴亭、2006年)210~212頁。

人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、『アバ、父。』と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかしして下さいます」。

1767年、ウェスレーは、「**御霊の証しⅡ**」という説教をしているが、彼の「確証の教理」に対する確信は弱まるどころか、強くなったと言えよう。ウェスレーは、確証の教理について「長年にわたり失われ忘れられてきたこの偉大な教理が再発見されたのは、神の特別な恵みが、メソジストの上に注がれ、彼らが聖書を探求し、体験によって裏付けられてきたことによるのです」¹⁶と述べている。

第一の信仰の確証は、聖霊によって信じる者の内にもたらされる直接的な証しであって「聖霊の確証」と言われるものである。Wilber Daytonは、『ウェスレーアン神学辞典』の中で、「聖霊の証しとは、ウェスレー主義者の理解するところによれば、信仰者に対して、神が受け入れたという事実を直接的に、内的に伝達することである」¹⁷と定義している。直接的に、内的に伝達する働きは聖霊の働きと言えよう。従って、確証の教理は、聖霊の証しと同義語であると言っても過言ではない。

ウェスレーは、聖霊の証しについて「御霊の証しは信仰者のたましいのうちになされる内的印象であり、それによって神の御霊が直接彼らの霊に、神のこどもとされたことを証しするのです」¹⁸と要約している。

もう一つの証しは「良心の確証」と言われるもので、「私たちの霊とともに」が、それを示唆している。ウェスレーは、説教「**私たちの霊の証し**」において、

コリント人への手紙第二 1章12節「私たちがこの世の中で、特にあなたがたに対して、聖さと神から来る誠実さをもって、人間的な知恵によらず、神の恵みによって行動していることは、私たちの良心のあかしするところであって、これこそ私たちの誇りです」というみことばに基づいて展開している。彼は良心の証しについて、「私たちは総じて、それがあの幸いな平安であり、たましいの静かな充足であり、それがここでパウロが描いているような良心の証しから生じるものであることと了解しています」¹⁹と述べて、良心の働きについて論じている。

更に付け加えると、ウェスレーは義認の後に与えられる聖霊の証しだけでなく、聖化された後にも、聖霊の証しがあることを確信していた。ウェスレーは、『キリスト者の完全』の中において、きよめられたこと、生得的罪からきよめられたことをどのように知ることができるかという問いに対して、「私たちが義とされた時に、聖霊が、私たちの霊とともに私たちの罪は赦されたと証しするように、私たちがきよめられた時、罪が取り除かれたと聖霊は証しをするのである」²⁰と明白に答えている。

もちろん、義認後における確証、聖化後における確証も、絶対的なものではなく、罪や疑いの故に失いうることもあるし、悔い改めと信仰によって新たに回復されることもある。²¹

C. ウェスレーの「確証の教理」の変化と発展

多くの場合、ウェスレーの神学は、固定化されたものであると誤解をしやすい。現実には、ウェスレーの救い、聖化の理解も、彼がメソジスト運動の指導者として、群れを導く中で、批判、疑問などを内外から受けながら、変化・発展していったと言えるだろう。

1. アルダスゲート経験以前：

ウェスレーは、アルダスゲートにおける福音経験をやるまでは、確証の教理を十分に理解していなかったと言えよう。ピーター・ペーラーに出会い、

¹⁹ ウェスレー『ジョン・ウェスレー説教53(上)』、293頁。；BE Works, Vol. I, p. 300.

²⁰ Works XI: p. 420.

²¹ 『ウェスレーアン神学辞典』369頁。

¹⁶ ウェスレー『ジョン・ウェスレー説教53(上)』、269頁。；John Wesley. The Works of John Wesley. Volume I-IV. Edited by Albert Outler. Nashville: Abingdon Press, 1984-87, Vol I, p.285 (以下, BE Works と略す).

¹⁷ リチャード・テラー監修『ウェスレーアン神学辞典』(福音文書刊行会、1993年)、369頁。Wilbert Daytonが「聖霊の証し」の項目を執筆し、確証の教理がカルヴァン主義の「永久保全説」との違いを強調している。

¹⁸ ウェスレー『ジョン・ウェスレー説教53(上)』、285頁。；BE Works, Vol. I, p. 296.

キリストの対する信仰が、罪に対する勝利、赦されたという思いからくる絶えざる平安という2つの結実をもたらすと聞かされた時、ウェスレーは、新しい福音(new gospel)と感じたのである。²² つまり、彼は、福音的な経験をもっていなかったので、確証の教理が何か新しい教え、新しい教理と思えたのであろう。

2. アルダスゲートの経験以後(1738年5月以降) :

1738年5月24日の夕方ウェスレーは、気が進まない姿でアルダスゲートの集会に参加し、ルターによる『ローマ人への手紙注解』の序文が読まれるのを聞く中で「9時15分前頃、キリストを信じる信仰によって神が人心に働いて起こしたもう変化について、彼が述べていた時、私は心があやしく熱くなるのを感じた。そして、キリストを、只一人の救い主であるキリストを信じた、と感じた。私の罪を、私の罪さえも取り去り給うて、私を罪と死との律法から救ってくださったとの確証(an assurance)が私に与えられた」²³とウェスレーは心に起こった変化について日誌に明白に記録している。これは、彼の福音的な回心と考えられるが、個人的な信仰の確信、確証(assurance)が彼の心に与えられたのである。Arthur Yatesは、「アルダスゲートの出来事は、ウェスレーの確証の教理、あるいは霊の証しの教理の基礎である」²⁴と述べている。つまり、彼のアルダスゲートの経験は、彼に個人的な確証、信仰の確信を与えたと理解できる。彼の到達した信仰の確信は、伝道と宣教に対する情熱を与えた。アルダスゲートの経験によって、聖霊による個人的な救いの確信が得られたことだが、それで、彼の「確証の教理」が確立したわけではない。

²² John Wesley, "Principles of a Methodist," Works, Vol. VIII, p.166.

²³ ジョン・ウェスレー『標準ウェスレー日記』(イムヌエル綜合伝道団、1984年)、I : 243~244頁。

²⁴ Arthur S. Yate, The Doctrine of Assurance with Special Reference to John Wesley (London, Epworth Press, 1952), p.11. Yatesは、18世紀に生きたウェスレーの確証の教理が、初代教父、中世の時代、宗教改革者たちの教え、17世紀の指導者たちの教えに遡ることを提示している。

3. メソジスト年会以降(1744年~1791年) :

アルダスゲートの福音経験以降、ウェスレーは、確証が救いに必要だと考えていたので、1744年の第一回の年会では、確証のない所に救いはないと明言した。しかし、翌年の1745年の年会では、義とされても、確証のない場合も認めながら、確証、聖霊の証しは、神のこどもの共通した特権であると信じ、信仰者はこれ信じ、説教者はこれを伝えなければならないとウェスレーは、信じていた。²⁵ 彼は「信仰について」(1788年)という説教の中で、「子であるという信仰は、適切に直接的に神的確信であり、すべての神の子は、「私が今生きているいのち、私を愛し、わたしのためにいのちを捨てられたお方、神の子を信じて生きることができるのです」²⁶と述べている。

III. 確証の教理の今日的意味

ウェスレーが強調した確証の教理は、私たち信仰者にどんなことを教えるだろうか。今日の私たちに、どんな意味合いがあるのだろうか。

A. 聖書の教理 :

第一に、確証の教理は聖書の教える教理である。確証の教理は、ウェスレーの創作でも、発見したものでもない。ウェスレーは、信仰の先人たちから学び、英国国教会の伝統を受け入れ、確証の教理は聖書の教理であることを確信し、メソジストたちにこの教理を教えたのである。

ウェスレーは、説教「御霊の証しII」の中で、「聖書が神のことばであると信じている人はだれでも、この聖句の重要性を疑うことはできません。この真理は、曖昧ではなく、偶然でもなく、一度ならずもしばしば、しかも明白な言葉づかいで、厳粛に、定まった目的を持って、聖書の中に啓示されています。それは神の子どもにも固有な特権の一つを表現しているのです」²⁷と記している。ウェスレーは、「御霊の証しI」(1746年)、「御霊の証しII」(1767年)の説教をローマ人への手紙8章16節に基づいても著わしたが、確証の教理を説明する聖句は、それだけではない。ウェスレーは、ガラテヤ人への

²⁵ 韓永泰『ウェスレーの神学(I)』240頁。

²⁶ Works VII: p.199.

²⁷ ウェスレー『ジョン・ウェスレー説教53(上)』268頁。; BE Works Vol. I, p.285.

手紙4章6節「、あなたがたは子であるゆえに、神は『アバ、父。』と呼ぶ、御子の御霊を、私たちの心に遣わしてくださいました」という聖句を挙げて、「これこそが、この聖句を開いたときに、だれの頭にも最初に浮かぶ、明白な自然な意味ではないでしょうか。これらの聖句はみな、第一義的に聖霊の直接的な証しを説明しているのです」²⁸と述べている。確証の教理はウェスレーの発明でも発見でもなく、聖書の教えであることを彼は固く信じていたのである。

B. 聖霊の通常の賜物：

第二に、信仰の確証は、聖霊が通常に、一般的な信仰者に与える信仰の確信のことである。ウェスレーは、「さらに勝れる道」(1787年)という説教の中で、聖霊の特別な賜物について論じている。聖霊の特別な賜物として、病気のいやし、将来の予告、奇妙なことばで語ること、異言の奇跡的な解釈を挙げている。「聖霊の特別な賜物は、皇帝コンスタンチヌスがクリスチャンに回心するという運命的な時以降、ほとんど聞かれない」²⁹と述べている。韓永泰は「この教理はこのように聖書的であり、伝統的であり、経験的であるがゆえに、ウェスレーはこれが聖徒の共通された特権であると続けて説教したのである」³⁰と述べて、確証の教理が聖書の教えであり、どのような時代の信仰者であっても経験できることを力説している、

C. 熱狂主義との違い：

第三に、確証の教理は熱狂主義や神秘主義でもない。スターキーは「ウェスレーは、この教理の内にひそむ熱狂主義の危険に対して決して無知ではなかった」と述べている。³¹ メソジスト運動が活発に働きを拡大するに及んで、ウェスレーとメソジストたちは、英国国教会のトマス・チャーチ、

ギブソン司教、バウトラー司教などから、熱狂主義のレッテルを張られ、厳しい非難をうけたのである。³²

熱狂主義の危険性を理解しながら、ウェスレーは、確証の教理を穏健に聖書的に理解する必要性を覚えていたのである。ウェスレーは、説教「**熱狂の性質**」(1750年)において「私たちは、宗教的熱狂が生み出す恐ろしい結果を考えると、あらゆる種類の宗教的熱狂に対して、勤勉の限りを尽くして警戒しなければなりません」³³と、熱狂主義への警戒を述べている。ウェスレーは説教「**御霊の証しⅡ**」(1767年)において、「もし、この真理を認めても、それを正しく理解していないならば、そこには熱狂へと暴走してしまう傾向が生じます。それ故、この重大な真理を聖書と理性の観点から例証し、確証することによって、神を恐れる人々をこの両極端の危険から守ることは、最も必要とされていることです」³⁴と述べている。

藤本は、ウェスレーの確証の教理について、「ウェスレーの目標は、本人が強調しているように、一方で、直接的な聖霊の証しを否定する理性主義と、他方で、内的証しへ疾走して、客観的啓示と理性を否定する熱狂主義との、二つの極端の中道を舵取ることであった」³⁵と適切に述べている。まさに私たちは「確証の教理」を穏健に聖書的に理解することが求められている。

Colin Williams は、真の確証と偽りの確証を区別する客観的な事実として、4つの点を挙げている。(1)悔い改め、あるいは罪の自覚、(2)強力な変化に対する確信、(3)聖霊の実、神の前に無価値である認識から来る謙遜さ、それに伴う柔和さ、忍耐、親切、善意。(4)新しい外的な生活。³⁶ 結実、結果の伴わない感情的な聖霊経験は、信頼に乏しく、危険でもあると言えよう。罪を悔い改めて、生まれ変わり、神の子とされたという確証、聖霊の証しが

²⁸ ウェスレー『ジョン・ウェスレー説教 53 (上)』274 頁。； BE Works Vol. I, p.289
²⁹ BE Work, III: p.263.
³⁰ 韓永泰『ウェスレーの神学(I)』、235 頁。
³¹ L.M. スターキー『ウェスレーの聖霊の神学』、110 頁。
³² 藤本満『ウェスレーの神学』(福音文書刊行会、1990年)、200-201 頁。
 ウェスレー『ジョン・ウェスレー説教 53 (下)』、72-73 頁。
³³ ウェスレー『ジョン・ウェスレー説教 53 (下)』90 頁。； BE Works Vol. II, p. 57.
³⁴ ウェスレー『ジョン・ウェスレー説教 53 (上)』268 頁。； BE Works Vol. I, p. 285.
³⁵ ウェスレー『ジョン・ウェスレー説教 53 (上)』248 頁。
³⁶ Colin Williams, John Wesley's Theology Today: A Study of the Wesleyan Tradition in the Light of Current Theological Dialogue (Nashville: Abingdon Press, 1960)、pp. 110—111.

あるならば、それにふさわしい聖霊の実、すなわち、人格的な結実と成長、誠実な歩みが期待されると言えよう。ウェスレーは、説教「**聖霊の証しⅡ**」(1767年)において、「私たちは、御霊のない所に、御霊の証しがあるなどと主張しているのでもありません。私たちは反対に御霊の実は御霊の証しから即座に生じると主張しているのです」³⁷と述べている。

20世紀に入り、聖霊の働きを強調するペンテコステ派、カリスマ派の成長と台頭の中で、聖霊の聖書的な、健全な理解が求められており、聖霊論全体の中で、聖霊の証し、確証の教理に関しても、聖書の学びに基づいた穏健な理解が求められていると言えよう。

<結論>

この小論で、ウェスレーがどのように確証の教理を信じ受け入れたのか、どのように理解していたのか、今日、確証の教理をどのように受け止めたらいいのかという角度から論じた。

聖霊は、今日も働いておられ、認罪を与え、主の十字架を人々の心に適応し、義とされた者に確証(聖霊の証し)を与え、人格に聖霊の実を結ばせ、信仰者を勝利に導いてくださる。信仰者は、聖霊の顕著な働きを信じ祈りつつ、信仰の歩みを続け、この時代に福音の真理を伝えていくのである。

(インマヌエル中目黒教会牧師)

³⁷ ウェスレー『ジョン・ウェスレー説教53(上)』272頁; BE Works Vol. I, p. 288.